瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 27
紅玉集 …… 29
十二月号月評 …… 30
恵贈句集拝見（68） …… 32
（69） …… 34
恵贈俳誌拝見（35） …… 36
特別作品「長崎旅情」 …… 38
句集「川」共鳴句Ⅱ …… 40
俳誌交歓 …… 41
琥珀集作品鑑賞 …… 42
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 43
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 45
エッセイ「句集余話」 …… 48
エッセイ「亀石」 …… 49
姫の国父の蒼天（最終回） …… 50
今井町・橿原神宮吟行記 …… 52
琵琶湖俳句サロン(2) …… 54
１００号記念特集号協力のお願い …… 55

2013/12　第93号

今月の一句

湯ほてりに宿着ふくらむ蕪鮨　桂樟蹊子

（平成二年作）

平成二年の作とあるがつい昨日のように思える作品である。仕事を沢山抱えて宇奈月温泉で三泊されたときの句である。暖房がきいていて部屋はあたたかかったが、黒部川の対岸は雪が深く、滝もすっかり凍つていたようである。その景色を眺めつつ、湯上りの蕪鮨を食べるときの気分は「生きながらえることの幸せと思った」との言葉を述べられた記憶が鮮明に残る句である。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

二番鉦

塩路隆子

朝霧に日の出を告ぐる鶏の声

峡の日に干す一枚の小豆莫莚

秋まつり羽織袴の村の長

曼珠沙華ここらあたりが野鍛冶跡

桐一葉出棺知らす二番鉦

栗の実の爆ずる音して夜のしじま

山あひに沈む一村夜霧濃し

PDF= 俳誌の salon

十二月号光耀抄

塩路　隆子選

叡山を離れ満月光増す　坂根　宏子
重陽の島相撲の負けっ振り　和田　郁子
冬瓜の小鍋に透ける水品煮　松田　和子
お宝はなにもないのよ望の月　森下　康子
秋光の湖にアートの魴模様　辻　知代子
溶明の叡山現るる霧の朝　笹井　康夫
賜はりし姫の眠りや月今宵　和田森早苗
一村を丸洗ひして大野分　松岡　和子
浮世にも曇り無きもの月今宵　北尾　章郎
草の実や四つ辻に来るポン菓子屋　石川かおり
光太郎の湖畔の乙女小鳥来る　井口　淳子
城山へ手向け夕日の曼珠沙華　伊東　和子
木の実落つ話の接ぎ穂探るとき　伊藤　純子
台風過風切羽をひろふ旗　竹内　悦子
平城山に恋の秋声聞く夕べ　笠井　清佑
篠山のデカンショ街道黒大豆　山口キミコ
秋夕焼こども一一〇番の旗　坂上　香菜
草を食む眼下の牛や秋の風　片岡久美子

PDF= 俳誌の salon

なほ続く朝顔日記彼岸入　桂　敦子
いも蔓を引けば甘藷の大家族　国包　澄子
案山子らの今風フアッション晴舞台　伊藤　和子
隠居かと訊ぬる農夫藷を掘る　阪本　哲弘
石仏はじっと瞑想木の実降る　塩路　五郎
夕顔やけふは来る人多かりき　杉本　綾
法螺ひびく出羽三神の蔦紅葉　鈴木　照子
水車辺の露草瑠璃の水しぶき　田中　浅子
灯りなき岳の厠や野分鳴り　谷口　俊郎
物干しの竿に移れり秋の月　辻　香秀
ふと目覚め枕のそばの月の影　中井　弘一
鵙猛る一村の畑流されて　中川すみ子
コスモスを一鉢求め風招く　西垣　順子
秋簾子の手をかりて納めけり　橋本　靖子
息継ぎの井戸にひと息秋の蝶　藤見佳楠子
いわし雲地球ざわざわ住み難し　宮崎左智子
寝待月いつまで猫の毛づくろひ　宮田　香
柘榴割るほろほろ落つる紅ダイヤ　山本　孝夫
ねこじゃらしにも良し悪しの陶器市　常田　創

PDF= 俳誌の salon

京都駅発秋天行のエスカレーター　粟倉　昌子
夕刊のやけに薄き日林檎剥く　常田　希望
バス止めて過ぎる島牛草紅葉　中本　吉信
神水の滴々の音さはやかに　木戸　宏子
月光の菩薩三尊凛々と　三川美代子
夕ひぐらし青き水面を震はせて　中井登喜子
蜻蛉に誘はれ行く伊勢街道　福本すみ子
月今宵金剛力士緩びませ　中村ふく子
永らへて帰らぬ人と月今宵　大松　一枝
鵙鳴ける江戸の客殿十王図　藤本　秀機
歩を止めて優しさ貰ふ朝の萩　宮越　久子
初鴨の小さきはばたき着水す　小澤　菜美
飛火する噂の火種曼珠沙華　小西　和子
焼さんま議論の尽きぬ第九条　吉田　宏之
ぶら下る瓢を叩き訪ねける　高谷　栄一
中秋の月を仰ぎて格子窓　竹内喜代子
団栗の大きく見ゆる二歳の手　土井久美子
時空超え式部と同じ月眺め　十時　和子
式部像月を背にして書物読む　難波　篤直
身に入むる津軽三味線よき音色　西田　史郎

PDF= 俳誌の salon

爽やかな朱きぬくもり根来椀　西村　敏子
藷蔓を炊きて夕食戦中派　能勢　栄子
風去りて静かな湖の居待月　増田　一代
妣の膝思ひ出させる相撲草　松田　洋子
地に堕ちてルビーを散らす柘榴の実　山田　愛子
コスモスを描く少女の膝小僧　横田　矩子
長月の闇や神話の蘇り　渡部　法子
吾亦紅気付かぬほどの自己主張　伊庭　玲子
藤袴浅葱斑が飛交うて　飯田美千子
テーブルに柚子一つある昼下り　板倉　安正
墓守の律儀さ嬉し秋彼岸　伊藤　憲子
吾に無き鎌身構へる枯蟷螂　稲田　和子
脳天に疲れ兆しぬ鶏頭花　大島みよし
粛として舞ふ白足袋や菊日和　大谷　信子
生誕地見下ろす墓の初紅葉　川崎　利子
銀狼の群走るかに芒原　黒住　康晴
伊達男の甘きひと言猫じゃらし　小林　久子
紙芝居の拍子木の音草の花　西郷　慶子
奥山の櫨の照葉に感無量　佐々木和子
柚子味噌の小鉢に似合ふおばんざい　佐用　圭子
秋麗をかたく閉ざして寶鏡寺　鷲見たえ子

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

秋夕焼

坂根宏子

賀茂川の激流うねる台風過
水嵩の減らぬ濁流秋夕焼
叡山を離れ満月光増す
鉄橋を渡る特急十三夜
園内の人気スポット瓢揺れ
母逝きて虚しさ埋むる彼岸花
台風過安堵の鳰のぽっと浮き

烏相撲

和田郁子

叢に桔梗一輪しゃんと咲く
若人の語らふベンチ酔芙蓉
境内を巡るおちこちこぼれ萩
重陽の烏相撲の負けっ振り
下戸なれど菊酒の列に並びける
名園を前に黙考秋の声
ひらひらと光降り来る良夜かな

秋深む

松田和子

冬瓜の小鍋に透ける水晶煮
ハロウィンの曲にて気ままダンシング
仲秋やかまどの飯の芳ばしき
寝転びて地球の息吹秋澄めり
天の風奏づる近江山の秋
風さはぐ大地を闊歩芒原
秋めくや芝一杯のテラス席

PDF= 俳誌の salon

秋　光

辻知代子

八月の湖の白波ひた奔る
波の目の白くっきりと湖の秋
秋澄むや大樽でんと峠酒舗
秋光の湖にアートの魚模様
琵琶の音の法話身にしむ孝子塚
秋の蝶とどまる杜の投句箱
湧くごときあきつの恋や湖ほとり

霧の朝

笹井康夫

叡山の鐘のひと撞き涼新た
虫しぐれ日の出待ちゐるカメラマン
しつらひを正し迎ふる芋名月
溶明の叡山現るる霧の朝
約束を少し遅らせ十三夜
繰り返す高温豪雨夏果つる
いにしへを旅する人や古都の秋

秋うらら

和田森早苗

賜はりし姫の眠りや月今宵
玻璃越しに嬰と対面秋麗
菊月の空に白線引くジェット
にんまりとも一度覗く子鯊日和
空と雲映して鄙の沼澄める
ランドセルの弾む下校児蝗飛ぶ
萩咲くや二度捨てられし猫のこと

大かぼちゃ

松岡和子

野良犬に猫の消息秋うらら
一村を丸洗ひして大野分
夫出番鉈で両断大かぼちゃ
血塗られし古代史の闇曼珠沙華
亡母の手の針目等しき秋袷
鰯雲広ごる真綿引くやうに
林檎園の一樹オーナー蒼き空

PDF= 俳誌の salon

ランチ難民　森下康子

眠る子の育つ大の字鵙高音
行列のランチ難民豊の秋
お宝は何もないのよ望の月
去るものを追ひかける性秋の雲
秒針の刻む音聴く夜長かな
来世またあなたの母ねぬくめ酒
あと三ミリ鼻高くなれ式部の実

初紅葉　北尾章郎

児らの継ぐ東京五輪天高し
浮世にも曇り無きもの月今宵
連れ多き八十路の幸や初紅葉
月の客窓辺に寄れりレストラン
星月夜峡より暮れて宿静か
けらつつき自筆を要す遺言状
御遷宮灯りを消して眞の闇

大津祭　石川かおり

草の実や四つ辻に来るポン菓子屋
地下足袋の機敏な動き松手入
秋深し木樽仕込みのウイスキー
ひちりきの呼吸に合はせ菊の宴
曳山のからくりに沸く秋祭　（大津祭三句）
二階へと粽投げ込み里祭
丈長の法被なびかせ祭衆

小鳥来る　井日淳子

明け方や秋冷のぼる足の先
運動会吾子を探せぬマスゲーム
光太郎の湖畔の乙女小鳥来る　（十和田湖畔乙女の像）
襖絵の志功画秋暑ふっ飛ばす
間引菜の一品すがし朝の卓
残暑きびし旅のプランの立たぬまま
スケジュールなんとかこなせ秋の風

PDF= 俳誌の salon

秋日傘

伊東和子

廃屋に何を求めて秋の蝶
月の夜を妙なるかぐや物語
森深く声おもむろに残る蝉
野分来てベランダの屋根消え失せる
城山へ手向け夕日の曼珠沙華
地下出て斜めにかざす秋日傘
台風禍友の電話のやさしかり

木の実落つ

伊藤純子

帆船に海賊気分秋晴るる
秋潮のひたひた寄する夫婦岩
大花野風車の裾を彩りぬ
木の実落つ話の接ぎ穂探るとき
外国の人と露天湯赤とんぼ
折り合ふといふも人の世草は実に
一叢の野菊幼き日の記憶

風切羽

竹内悦子

秋の川熊野古道の起点の碑
台風過風切羽をひろふ浜
女々しきや別れ鴉の声続き
十六夜や転勤知らす子の電話
秋出水ボランティア来て土砂除く
秋の湖声出して読む賢治の詩
名を宇治と変へて稲々川澄める

衣被

笠井清佑

鬼胡桃収穫二個に嗤ひけり
門跡寺に尼僧の影や虫しぐれ
紅玉の酸っぱさ残す自家のジャム
今生の仕上げのメニュー衣被
まほろばと称ふる稲田山の辺に
この先の人生ドラマ水澄めり
平城山に恋の秋声聞く夕べ

PDF= 俳誌の salon

黒大豆

山口キミコ

篠山のデカンショ街道黒大豆
ちぎれ雲浮かび丹波の秋高し
熱つ熱つの丹波焼栗頬張れり
白萩のこぼるるベンチひと休み
道の駅トイレに活けし水引草
丹波路に積む枝豆や路肩売
「楽天」に夫の破顔の夜長かな

天高し

坂上　香菜

赤ワイン酌みて名月ほしいまま
正面に一本の道天高し
秋夕焼こども一一〇番の旗
葉の先のこそと音して飛蝗かな
小鳥来る安全圏を保ちつり
うとましき護送車通過鵙猛る
黐の実やおうな自己流ストレッチ

秋澄める

片岡久美子

草を食む眼下の牛や秋の風
入日差す畦やら稲田野は錦
風受けて咲く草の花リフト駅
足湯する秋岳の雪仰ぎつつ
立上がる恐竜オブジェ秋澄める
先見えぬゴンドラ霧の宙を行く
雨降るも湿原に立ち草紅葉

おもてなし

桂　敦子

秋虹や五輪招致の夢叶ひ
「おもてなし」脚光浴びて秋うらら
青春の淡き思ひ出吾亦紅
なほ続く朝顔日記彼岸入
台風一過豪雨に耐へし渡月橋
名月の今宵光を満天に
水澄むや新調成れる高瀬舟

PDF= 俳誌の salon

甘藷の大家族　国包　澄子

不揃ひの無花果盛りて無人棚
満月のこれ程近し二月堂
マニキュアの赤ためらひつ墓洗ふ
いも蔓を引けば甘藷の大家族
刈取られ火屑の嵩の彼岸花
ゆくりなき人と月見の団子かな
台風の爪痕いえぬ嵐山

案山子　伊藤　和子

案山子らの今風ファッション晴舞台
帯揚も帯じめも替へ寒露の日
稲刈り機を操る娘赤ブーツ
道端の落穂ひろふや群すずめ
日向へと羽ばたき急ぐ秋の蝶
秋暁を待てず戸を開け深呼吸
コンサートの余韻身に入む街明り

僥　倖　阪本　哲弘

今朝秋のオルガン囲む児の瞳
小半刻雨宿りせむ新走
はらからを見失ひたる秋茜
僥倖や車窓に富士の爽やかに
鵙日和腰曲げて選る陶器市
晩年はシンプルが良し衣被
隠居かと訊ぬる農婦藷を掘る

埴　輪　塩路　五郎

柚子の香の一品夕の藍小鉢
千姫へ束の間の恋菊師かな
秋の空仰ぐ埴輪の虚ろの目
石仏はじっと瞑想木の実降る
腕を組むゴリラの孤独秋思濃し
再雇用待てる棚田の捨て案山子
小流れに走る魚影や草の絮

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

紅ダイヤ

山本　孝夫

街路樹に吹く強弱の野分かな
黄金の大満月やひがし空
月天心救急サイレン遠ざかる
息災の他は望まず秋天下
柘榴割るほろほろ落つる紅ダイヤ

秋桜

常田　創

ねこじゃらしにも良し悪しの陶器市
黒織部購うてより野分来る
鳩笛の楽しきことよテスト明け
更地にも庭のあるころ秋桜
抜け道は赤のまんまの泥の道

コック帽

粟倉　昌子

携帯の履歴にあまた水見舞
天帝に翻弄されし九月逝く
京都駅発秋天行のエスカレーター
秋思いま自由奔放志功の絵
さはやかや折り目正しきコック帽

赤のまま

常田　希望

秋の水小魚よりも影速し
近道が寄り道となる赤のまま
夕刊のやけに薄き日林檎剥く
目礼で済ます別れや黄落期
行く秋の鍵の失せたる木箱かな

草紅葉

中本　吉信

細波の寄せ返す磯新松子
バス止めて過る島牛草紅葉
咲く前は赤の縦線彼岸花
がちゃがちゃや机上に本の乱れ積み
窓ごとに暮し色々秋灯

PDF= 俳誌の salon

十一月号月評

塩路　隆子

二〇一三年も終わりの月を迎える。日々忙しく過ごしているが、今年はさらに慌ただしく暮れようとしているが、皆様をはじめ、健康に恵まれ過ごせたことが何よりの喜びである。来年の百号記念特集号発刊を目標に会員一人ひとり力を合わせて頂きたく思っている。一人の力は小さくとも全体の力を合わせれば何か出来ると信じている。ご協力をお願い致したい。

叡山を離れ満月光増す　　坂根　宏子

この度句集「野山の道」を出版されたこと、改めてお祝いをしたい。京都にお住まいであるから、常に比叡山を仰ぎ、四季を豊かに過ごされている。今年の月は何年ぶりかの真の満月だったようである。叡山を離れた月がいよいよ光を増し、煌々と京都の街並みを照らしている様子をうまく表現された。大切にして頂きたい1句である。

重陽の烏相撲の負けっ振り　　和田　郁子

重陽とは九月九日のこと上賀茂神社では、その日に烏相撲が催される。加茂族の祖先が、神武天皇の遠征を先導したのは八咫烏であるという古事に発しての神事である。悪霊を追い出す子供相撲を、作者は見にゆかれたのであろう。その勝者よりも、負けっぷりのよかった敗者へ、あたたかい眼を向けられた作者の拍手が見える。潔い敗者に焦点を合わされた作者に筆者も拍手・・・・。

冬瓜の小鍋に透ける水晶煮　　松田　和子

瓜の類であっても、冬までも長持ちするから冬瓜と名付けたようである。いまは小型のスーパーでは、輪切りにした冬瓜も売り出されている。さて作者にはご高齢のお母さまがいらっしゃる。若者にはなかなか好まれにくい冬瓜を、美味しい出汁をたっぷり、小鍋でことこと透き通るまで煮て、溶き葛でとろみをつけてお母さまのために炊きあげられた、お母さまの目を細めて召し上がる様子など、いろいろと連想の広がる句である。評を書いている筆者も久しぶりに冬瓜を炊こうかなーの気分にさせられた句である。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon